

東日本大震災に関わる地域社会と大学教育の連携

背景・目的

本学科は、実習・演習の一環として全国各地にフィールドを設定し、諸分野の調査・研究活動を学生に体験させると同時に、調査協力者に対しその成果を提示・還元してきた。

今年度は、直前に起こった東日本大震災によって東北地方一帯が甚大な被害を蒙ったことをふまえ、被災地域で起きている様々な問題に対して人文系学問研究がいかなる役割を果たせるかを学生とともに検証しつつ、調査研究を進めることとした。

実施内容

それぞれの調査は、計画、実施、成果報告までの全過程を学生に立案させ、実践した。

参加教員の専攻分野に合わせた課題によるフィールド活動を展開するなかで、現地での地域社会構成員との直接的なふれあいを重視するが、被災地であることも十分配慮した。

現地調査には、効率的な移動手段として一部貸し切りバスを使用した。

教員は、主として宮城県内における各フィールドで学生の引率・付添を行った。

志村文隆ゼミ(地域言語学)では、被災地における方言の役割と使用者の意識を、石巻市在住者と宮城県外からの支援者に、避難所等で聞き取り調査を行った。両者ともに方言に対するプラス評価が高い一方で、市内在住者にはマイナスイメージを選択する回答も見られた。方言を話題とした、避難所での学生と被災者の会話、触れあいも有意義であった。

高橋英博ゼミ(社会学)では、4年次のゼミの活動を中心にして、仙台市内のさまざまな事業所を対象にして、「食」が持っている都市にとっての今日的な役割について震災との関連を考慮し

つつ広範な調査と分析を行った。その結果については、ゼミ論集に概要を報告する予定である。

井上研一郎ゼミ(日本美術史)では、被災した仙台市内の私立美術館(共生福祉会福島美術館)で支援活動をおこなった。作業は収蔵作品の一時避難のための梱包と運搬が中心で、美術作品の取り扱いに習熟している大学院生に学生たちが加わり、同館学芸員の指示を適確にこなすことができた。また、震災発生から今日に至る経過と緊急措置の具体的な事例を学芸員から直接うかがったことは貴重な経験となった。

これに関連して、学芸員課程の主催でおこなわれたシンポジウムでは、本学科の学生が積極的に活動し、県内の博物館・美術館の被災状況や復旧対策、収蔵資料の保全・修復作業などについて現場の学芸員への取材などを通じて多くの成果を得た。

結果及び考察

未曾有の規模の被害をもたらした東日本大震災を体験した我々は、学生や教員自身のなかにも被災者が少なからずおり、十分な活動を展開できなかった分野もある。また、当初の計画とは異なる地域や分野での活動余儀なくされたこともあった。

しかし、どの地域や分野においてもその場ごとに地域住民との連携のあり方を考えることが可能であり、真摯に取り組めば必ず学生たちにとって大きな成果が得られることが明らかになった。

とくに、学芸員課程などの活動と連携してそれぞれの専門分野でのノウハウを生かしつつ、被災地支援の実をあげながら学生が積極的な役割を果たすことができたことは大きな成果といえるだろう。